



Title	『人間の大地』における証言報告：ギョメとスペイン人伍長のエピソード分析
Author(s)	藤田，義孝
Citation	Gallia. 2008, 47, p. 93-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9772
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『人間の大地』における証言報告¹⁾

—— ギヨメとスペイン人伍長のエピソード分析 ——

藤田 義孝

はじめに

一人称物語である『人間の大地』の語り手「私」が他者の心理を語るには、原則として言語伝達や共通体験といった手段に頼らざるをえない。ギヨメとスペイン人伍長のエピソードにおいては、証言に基づく形で2人の心理が語られているが²⁾、いずれの場合も語り手はまず証言者の身体を描写し、次に直接・間接話法で証言を伝えながら相手の心理を情報過剰ぎみに語っている。これら2つの証言報告は、作中においてどのような意味を持つのだろうか。この問いに答えるため、本稿では、まずフォンタニユの枠組を援用して各挿話の身体描写を分析し³⁾、続いて証言報告における情報過剰の問題を検討したい。

1. ギヨメのエピソード分析

1.1. 証言者の身体観察

ギヨメが生還した当日の夜、「私」は寝室で彼に付き添い、二人きりの状態で証言を聞く。だが、語り手は証言報告の前に自分の観察を物語っている⁴⁾。

J'observais ton visage noir, tuméfié, semblable à un fruit blet qui a reçu des coups. Tu étais très laid, et misérable, ayant perdu l'usage des beaux outils de

- 1) 本稿は、2006年度日本フランス語フランス文学会秋季大会（於岡山大学）における研究発表をまとめ直したものである。
- 2) 親密な聞き手・理解者である語り手「私」のエートス形成については次の拙論を参照。藤田義孝、「『人間の大地』における物語情報—1人称体物語の制約を越えて」、『関西フランス語フランス文学』、No.10, pp.72-83.
- 3) フォンタニユは視点の問題を視点主体 (source) と視点対象 (cible) の関係と捉え、対象を把握しようとする知覚・認識力の強弱と知覚・認識範囲の広狭を組み合わせる以下のような4戦略を区別した。すなわち、強い知覚・認識力によって得た情報を広範囲から集めて総合し、全体把握を目指す包括戦略。知覚・認識力は弱いが広範囲からあらゆる情報を集めて網羅的把握を目指す累積戦略。逆に範囲を限定し、深く知覚・認識することで模範性・典型性に到達しようとする抽出戦略。そして、知覚・認識の深さも広がりもなく、対象を個性・特殊性において捉える個別化戦略である。Jacques Fontanille, *Sémiotique et littérature*, P.U.F., 1999, pp.48-54.

	知覚・認識力=強い	知覚・認識力=弱い
範囲=広い	包括戦略（全体性志向）	累積戦略（網羅性志向）
範囲=狭い	抽出戦略（模範性志向）	個別化戦略（特殊性志向）

- 4) *Terre des hommes* (1939) の引用はすべて Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes*, t. I, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1994 所収の版による。引用の後、丸カッコ内にページ数を記した。引用文中の下線や番号は論者によるものである。

ton travail : tes mains demeuraient gourdes, et quand, pour respirer, tu t'asseyais sur le bord de ton lit, tes pieds gelés pendaient comme deux poids morts. ⁽¹⁾ Tu n'avais même pas terminé ton voyage, tu haletais encore, et, lorsque tu te retournais contre l'oreiller, pour chercher la paix, alors ⁽²⁾ une procession d'images que tu ne pouvais retenir, une procession qui s'impatiait dans les coulisses, aussitôt se mettait en branle sous ton crâne. Et elle défilait. (p.193)

引用前半の下線部ではギヨメの顔と手足が描写され、後半の下線部（１）では、ギヨメの喘ぎや苦しみを見て取った「私」が、彼の旅はまだ終わっていないと判断している。「私」は、ギヨメの身体についての情報収集と総合によって認識力を強化し（累積戦略→包括戦略）、下線部（２）ではギヨメの頭の中での出来事さえ見通している。このように「私」は、証言者の言葉以前に身体を観察から情報を得ているのだ。ギヨメが語り始めた後も、証言自体は背景にとどまり、「私」は自分の観察を語り続ける。

⁽¹⁾ Boxeur vainqueur, mais marqué des grands coups reçus, ⁽²⁾ tu revivais ton étrange aventure. [...] Et ⁽³⁾ je t'apercevais, au cours de ton récit nocturne, marchant, sans piolet, sans cordes, sans vivres, escaladant des cols de quatre mille cinq cents mètres, ou progressant le long de parois verticales, saignant ⁽⁴⁾ des pieds, des genoux et des mains, par quarante degrés de froid. (p.194)

語り手は、下線部（１）で冒険の痕が刻まれたギヨメの身体を示し、下線部（２）と（３）で物語るギヨメの様子を描き出している。ただし、ギヨメの語り行為を示すのは「ton récit nocturne」の一言だけで、「revivre」や「apercevoir」など体験や知覚に関わる動詞が用いられ、下線部（４）では再び証言者の身体に言及される。つまり、語り手は証言の言葉自体より、物語る身体としてのギヨメを総合的に捉え、彼が「生き直す」体験に迫ろうとしているのである。

こうした身体観察の語りは、物語内容のレベルでは登場人物「私」の情報収集に対応するが、語りのレベルで見れば、物語情報と理解者「私」のエートスを説得的に提示する戦略といえる。ギヨメの身体情報を集める累積戦略、情報の総合による認識力強化、そして包括戦略への移行によって、語りにおける情報量の増大が、「私」の洞察の深まりとして説得的に提示されているのだ。さらに、エピソード全体を見るならば、ギヨメという限定された対象を深く知ることで模範性を志向する戦略、すなわち抽出戦略に対応しているといえるだろう。

1.2. 証言伝達における情報過剰

身体観察の後にはギヨメの証言が直接・間接話法で伝えられるが、彼が生還を諦めそうになる話の山場では、証言報告に語り手「私」の声が介入する。

Tes scrupules mêmes s'apaisaient. Nos appels ne t'atteignaient plus, ou, plus exactement, se changeaient pour toi en appels de rêve. Tu répondais heureux par une marche de rêve, par de longues enjambées faciles, qui t'ouvraient sans efforts les délices des plaines. ⁽¹⁾ Avec quelle aisance tu glissais dans un monde devenu si tendre pour toi ! Ton retour, Guillaumet, tu décidais, avare, de nous le refuser.

⁽²⁾ Les remords vinrent de l'arrière-fond de ta conscience. Au songe se mêlaient soudain des détails précis. «Je pensais à ma femme. Ma police d'assurance lui épargnerait la misère. Oui, mais l'assurance...» (p.195)

下線部(1)は、ギヨメの内面を理解した立場から呼びかける語り手の声であり、ギヨメの証言伝達とは考えられない⁵⁾。こうした情報過剰を冒した上、睡魔に関するギヨメの発言をタイプ原稿から削除してまで⁶⁾、「私」の感情的な声が証言報告に介入する理由は何だろうか⁷⁾。試みに、叙情性を排除する形で下線部(1)を書き換えてみよう。すると«Tu glissais avec aisance dans un monde devenu si tendre pour toi. Tu décidais de nous refuser ton retour.»となり、語りのトーンにおける「感情的な声／中立的描写」という対立が失われるため、下線部(1)の後の段落替えが不自然になってしまう。普通ならそこで«mais»や«cependant»といった接続詞が入るところだが、逆接の接続詞を使うと、先の展開が読めるため話の意外性が損なわれてしまう。しかし、小さな気がかりがもたらした驚くべき結果は、2段落先で«Une fois debout, tu marchas deux nuits et trois jours» (p.195)と明かされるまで伏せておく必要があるのだ。なぜなら、この意外性とは、単に話を面白くするスパイスではなく、「人間は論理の予見を裏切る」という重要なテーゼの物語レベルにおける事例に他ならないからである。それゆえ、下線部(1)と(2)の間で決定的な変化を示しながら、しかも読み手には先を読ませないようにしなくてはならない。そのためにこそ、下線部(1)で語り手の感情的な声が介入し、物語の山場に読み手の注意を引きつけながら、段落替えと同時に単純過去(«vinrent»)を導入した上、語りのトーンを変えることで物語の転機をはっきりと記しているのだ。

語り手の声が介入するのが、睡魔という身体的誘惑との対決時であることから、身体に対する精神の優越というテーマも読み取れる。このテーマは、証言を終えて眠るギヨメを「私」が眺める場面で明示的に現れる。«Tu t'endormais enfin, ta

5) たとえば、ギヨメが«Avec quelle aisance je glissais dans un monde devenu si tendre pour moi !»等と証言したと考えるのは不自然ではないだろうか。藤田義孝、前掲論文、pp.73-74も参照。

6) タイプ原稿には«situation était si désespérée qu'après le plus bref examen je me serais couché pour m'endormir. Le sommeil, quelle tentation !»というギヨメの言葉が存在した。*Œuvres complètes, op.cit.*, p.1028.

7) もちろん「敵対者」である睡魔の甘美さを強調することで、ギヨメの最終的な勝利＝生還に向けて話を盛り上げる役目を果たしていることは明らかだが、それだけではギヨメの証言が削除された理由は説明できない。後に述べるとおり、語り手がギヨメの表現力に敬意を表しているならなおさらである。

conscience était abolie, mais de ce corps démantelé, fripé, brûlé, elle allait renaître au réveil, et de nouveau le dominer. Le corps, alors, n'est plus qu'un bon outil, le corps n'est plus qu'un serviteur. Et, cet orgueil du bon outil, tu savais l'exprimer aussi, Guillaumet» (p.196) 語り手はギヨメの言葉を事後的に引用し、目覚めていた精神と眠っている身体を対置してみせる。挿話を締めくくるキーワードは「責任感」(p.197) だが、挿話の語りに織り込まれていたのは「論理の予測を裏切る人間」、「身体に対する精神の優越」という2つのテーマだった。したがって、ギヨメの証言伝達における情報過剰は、一人称物語の制約遵守よりも、これらのテーマを語りにおいて効果的に伝えることを優先した結果と見なすことができよう。

2. スペイン人伍長のエピソード分析

2.1. 証言者の身体観察

スペイン人伍長の挿話においても、語り手は証言報告に先だって証言者の身体を描写している。ただし、その機能は「私」の洞察力強化ではなく、比喩的な描写を通じて伍長の目覚めに寓意的な意味を与えることにある。

Ainsi le sergent reposait-il, ⁽¹⁾ roulé en boule, sans forme humaine, et, quand ceux qui vinrent le réveiller eurent allumé une bougie et l'eurent fixée sur le goulot d'une bouteille, ⁽²⁾ je ne distinguai rien d'abord qui émergeât du tas informe, sinon des godillots. D'énormes godillots cloutés, ferrés, des godillots de journalier ou de docker.

Cet homme était chaussé d'instruments de travail, et tout, sur son corps, n'était qu'instruments : ⁽³⁾ cartouchières, revolvers, bretelles de cuir, ceinturon. Il portait ⁽⁴⁾ le bât, le collier, tout le harnachement du cheval de labour. On voit au fond des caves, au Maroc, des meules tirées par des chevaux aveugles. Ici, dans la lueur tremblante et rougeâtre de la bougie, ⁽⁵⁾ on réveillait aussi un cheval aveugle afin qu'il tirât sa meule. (p.272)

語り手は、下線部(1)で眠る伍長を不定形なかたまりとして提示し、(2)では彼自身の代わりに彼の軍靴を描き出す。(3)では伍長が身につけている装具が列挙され、(4)で装具一式が馬具一式に喩えられた後、(5)で伍長に馬のメタファーが適用されている⁸⁾。装具の列挙(累積戦略)を契機にイメージのレベルで物から動物へ移行した伍長は、最後に目覚めて「人間」となる。「C'est ici que l'homme apparaît. C'est ici qu'il échappe aux prévisions de la logique : le sergent souriait !» (p.273) ここにもギヨメの例と同じく、眠る身体と目覚めた意識の対立が見られ、眠る肉体は物や動物にすぎないが、意識が目覚めると人間が現れて論

8) 馬のイメージは目覚めの直前の場面にも現れる。「Nous nous assimes sur son lit, l'un de nous passa doucement son bras derrière son cou, et souleva cette lourde tête en souriant. Et ce fut comme, dans la bonne chaleur de l'étable, la douceur de chevaux qui se caressent l'encolure.» (p.273)

理の予測を超えるというテーゼが確認できる。「私」は眠る伍長を見て、彼の平穏な眠りと辛い目覚めを想像するが、その予測は目覚めた伍長の微笑みによって見事に裏切られ、「Quelle est donc cette tentation ?」(p.273)と問うことになる。この問いはエピソード全体のちょうど真ん中にあり、伍長の証言を含む後半部を、答え探求のパートとして位置づけている。つまり、挿話の中核となるこの問いを準備することが、前半部における身体観察と省察の主な役割なのである。

2.2. 証言伝達における情報過剰

問いの後、語り手はメルモスと過ごしたバリの一夜を思い出し、改めて「Et toi, sergent, à quel banquet étais-tu convié qui valût de mourir ?」(p.274)と伍長に問いかける。そして、伍長の打ち明け話が後説法で語られる。

J'avais reçu déjà tes confidences. Tu m'avais raconté ton histoire : petit comptable quelque part à Barcelone, tu y alignais autrefois des chiffres sans te préoccuper beaucoup des divisions de ton pays. Mais un camarade s'engagea, puis un second, puis un troisième, [...]. Vint enfin la nouvelle de la mort de l'un d'entre vous, tué du côté de Malaga. (1) Il ne s'agissait point d'un ami que tu eusses pu désirer venger. Quant à la politique elle ne t'avait jamais troublé. (2) Et cependant cette nouvelle passa sur vous, sur vos étroites destinées, comme un coup de vent de mer. Un camarade t'a regardé ce matin-là :

« On y va ?

— On y va. »

Et vous y êtes « allés ». (p.274)

直喩表現を含む下線部 (2) の断定は、伍長の心理的变化を述べた下線部 (1) と「Et cependant」でつながれることで心理的なコノテーションを帯びている。下線部 (2) では「tu」に代わって複数の「vous」が用いられ、伍長の仲間も含む形で断定がなされているが、仲間の心理に関する証言が見られないため断定は情報過剰といえる。ただし、その情報過剰は直後のくだりで巧みに「自然化」される⁹⁾。「On y va ?— On y va.」という問いと答えの対称性、そして会話の極端な短さから、彼らはわずかな言葉で分かり合える似通った存在であり、心理的にも同質であるという印象が読み手に与えられるからだ。しかし、伍長たちが同じ動機で兵役志願したのだとすると、それはいかなる動機だったのかが直ちに問題となる。その問いに答える代わりに、語り手は鴨とアヒル、ガゼル、飛行士としての体験談など他の事例を次々に物語る (pp.274-276)。そのため、読み手は問いを一時棚上げにし、答えを期待して話を読み進むことになるだろう。

このように、スペイン人伍長の挿話における情報過剰は、伍長による心理的変

9) 神話作用における「自然化」(«naturalisation») については次を参照。Roland Barthes, «Le mythe, aujourd'hui» [1957 ; 1970], in *Œuvres complètes*, t.I, Seuil, 1993, p.699.

化の証言と、彼と仲間が共に兵役志願した事実報告という、それぞれ単独では正当な2つの情報が交わる点に存在しており、語り手はこの2つを組み合わせで物語ることで、彼らに共通の心理を、ひいては人間の普遍的心理を明らかにしようとする。そのとき語り手は、情報過剰を巧みな仕方であ読みへの動機づけに転換し、物語の原動力の一部となしているのだ。

3. 両エピソードの比較

ギヨメとスペイン人伍長のエピソードは、2つの点で大きく異なる。1つは抽象化の度合いと視点戦略の違いであり、もう1つは話法の分量および言葉に与えられる重みの違いである。

第1の点については、ギヨメの挿話が含まれる第II章«Les Camarades」、スペイン人伍長の挿話が含まれる第VIII章«Les Hommes」と、章の題名が既に抽象度の違いを示している。ギヨメの挿話は彼の固有名で始まり、彼は最初から凡人とは異なる優れた人物として提示される。「Guillaumet, je dirai quelques mots sur toi, mais je ne te gênerai point en insistant avec lourdeur sur ton courage ou sur ta valeur professionnelle» (p.190) それに対してスペイン人伍長は、「petit comptable quelque part à Barcelone» (p.274) という表現に見られるとおり、大都市に埋もれるように無名の存在として生きていたことが示される。伍長は、挿話の元原稿であるルポルタージュでは«le sergent R...»と呼ばれていたが¹⁰⁾、個性性を記すイニシャルが削除されることで匿名化され、普遍的な事例の担い手として扱われることになったのである。

挿話での扱いにおける抽象度の違いは、視点戦略の違いにも反映している。ギヨメの挿話では、身体各部の情報集約によって認識力が強化され、ギヨメの心身状態が洞察されていた。ただし、視点対象はギヨメ個人に限られるため、挿話全体としては模範性志向の抽出戦略に対応する。そして、第VIII章でスペイン人伍長の挿話が語られる直前の«J'ai trop parlé de quelques-uns et j'aimerais parler de tous.» (p.270) という言葉により、視点戦略は明示的に模範性から網羅性へと志向を転換する。じじつ、スペイン人伍長の挿話においては、二人称複数による一般化や、多数の事例による認識範囲の拡大など、全体の戦略は明らかに累積的である。このように、ギヨメの挿話は模範性を、スペイン人伍長の挿話は網羅性・一般性を志向するが、『人間の大地』が、個別の事例から普遍的な人間の真理を明らかにしようとするテキストである以上¹¹⁾、2つの挿話は、それぞれ模範性と一般性を通じて最終章（第VIII章）の包括戦略に貢献すると考えられよう¹²⁾。

第2の点、すなわち話法と言葉については、両エピソードの長さがほぼ同じであるにもかかわらず¹³⁾、話法の量に大きな差があることが注目に値しよう。ギヨ

10) «Hep ! Sergent ! Pourquoi es-tu parti ?», *Reportages*, in *Œuvres complètes, op.cit.*, pp.416-423.

11) 藤田義孝、前掲論文、pp.81-82.

12) 第VIII章III節の«La vérité c'est le langage qui dégage l'universel» (p.278) という一文は、語り手による真理探求が普遍性・全体性志向、つまり包括戦略に基づくことを示すと思われる。

メの言葉はかなり長く引用され、直接話法だけで合計2ページ以上になるが、スペイン人伍長の言葉は「C'est l'heure ?」、*«On y va»*というごく短い2言以外は間接話法であり、全部合わせても十数行である。この違いは、物語における両者の役割の違いを反映している¹⁴⁾。ギョメはすぐれた表現能力を持つ者として提示され、生還して最初に「私」に伝えた*«Ce que j'ai fait, je te le jure, jamais aucune bête ne l'aurait fait.»* (p.192) という言葉は2度引用された上、語り手の知る限りもっとも気高い言葉として絶賛される (p.196)。ギョメの証言に直接話法が多いのも、彼の表現力に対する語り手の敬意によるものと考えられよう。ギョメの固有名と言葉が重視されるのは、挿話におけるキーワードが責任感であり、責任とは固有名を持つ一人一人が自ら担うものだからであろう。これに対し、固有名の記されないスペイン人伍長は表現能力に乏しい存在とされる。*«Il m'est venu quelques images pour m'expliquer cette vérité que tu n'as pas su traduire en mots»* (p.274) 伍長を突き動かした動機は、本人に代わって語り手「私」が言語化するのである。伍長の挿話は*«On découvre à cette minute-là cette unité qui n'a plus besoin de langage.»* (p.276) とあるように、言葉を超えた友愛の事例として扱われ、名前や言葉といった記号は重視されない。

このように、2つのエピソードにおいては、章の題名、視点戦略、話法の量、言葉の役割といったすべての要素が連動し、模範的個人の責任感と、人間の対立を消し去る友愛というテーマをそれぞれ浮き彫りにしているのである。

おわりに

以上のように、表現力と責任感を備えた模範的存在とされるギョメの挿話は抽出戦略に、言葉のいらない友愛を求める匿名的存在とされるスペイン人伍長の挿話は累積戦略に対応しており、両挿話に共通のテーマは、肉体に対する精神の優越と、人間心理の予測不能性であった。では、これら2つの挿話は、物語全体においてどのような機能を果たしているのだろうか。

『人間の大地』を一つの物語と捉えるなら、全体の山場は「私」の生死がかかった第VII章「Au centre du désert」にあると考えられる。遭難した「私」とブレヴォーはギョメの体験談に支えられ¹⁵⁾、最後にベドウィン人に救われるが、彼は「私」にとって*«Tu es l'Homme et tu m'apparais avec le visage de tous les hommes à la fois.»* (p.268) と全人類を代表する「人間」として現れる。つまり、ギョメの体験談がいわば「援助者」として機能することで¹⁶⁾、「私」と「人間」の出会いが実

13) ギョメの挿話は第II章II節 (pp.190-197)、スペイン人伍長の挿話は第VIII章II節 (pp.271-276) にあたる。

14) テキスト内在論の立場を離れるなら、サン＝テグジュペリのスペイン語能力ではスペイン人証言者の言葉を正確に記憶し再現することは難しかったという可能性も考えられる。

15) たとえば、砂漠で遭難して進むべき方角を決めるとき、「私」は「アンデス山中でギョメを救った方角だったというただ一つの理由」(p.247) で東北東を選ぶ。また、救出者の自覚 (p.258) や鶏の幻聴 (p.267) を体験したときも、「私」はギョメの体験談を思い出している。

16) 「援助者」(«adjuvant») については次を参照。A. J. Greimas, *Sémantique structurale*, P.U.F., 1995[1986], pp.178-180.

現されたことになる。

また、スペイン人伍長の挿話においては、複数の人物を結び合わせる一人称・二人称の語りが「我々」の範囲を拡大し、最後には伍長たちを含む普遍的な「on」に到達する。語り手は伍長の打ち明け話の後、鴨とアヒル、ガゼルの話をしてから「Et à nous, que nous manque-t-il ?」(p.275)と人間の問題に立ち戻り、「Que trouvais-tu ici, sergent, qui t'apportât le sentiment de ne plus trahir ta destinée ?」(pp.275-276)と伍長に問いかける。そして語り手は仲間との体験を「nous」で物語り、最後に伍長の動機を理解する。「Pourquoi l'aurait-il plaint, sergent, celui qui te préparait pour la mort ? Vous preniez ce risque les uns pour les autres. On découvre à cette minute-là cette unité qui n'a plus besoin de langage. J'ai compris ton départ.」(p.276)。語り手「私」は一人称・二人称の語りによって人物を結び合わせていき、全員が言葉を越えた普遍的な「on」に含まれるとき、初めて伍長の動機を理解するのである。

このように2つの挿話は、それぞれ模範性と一般性によって、「私」が普遍的「人間」に到達する契機となっている。では、なぜ証言報告のエピソードが「人間」に到る鍵となるのだろうか。2つのエピソードにおいては、証言者の身体が最初の重要な情報源となり¹⁷⁾、親密な二人称による証言報告の間接話法によって聞き手＝理解者「私」のエートスが形作られていた¹⁸⁾。つまり、相手の身体と言葉に向かい合うことが、他者理解の基本戦略として語りに織り込まれているのである。2つの挿話が「人間」に到る鍵として機能しているのは、この、相手を全人的に捉えようとする戦略が、挿話内だけでなく物語のマクロ構造にも反映された結果といえるのではないか。だとすれば、近しい対話を通じた全人的な他者理解の姿勢は、物語全体を貫く意義を持つことになる。『人間の大地』という物語の真価は、ヒューマニズムのモラルではなく、語り手「私」が対話的な語りを通じて他者を理解しようとし、読み手も含めたあらゆる人々を友愛において結びつけようとする、その人間的な語りにこそあるのではないだろうか。

(大谷大学任期制助教)

17) スペイン人伍長の場合、身体観察は結果的に「人間は論理の予測を裏切る」という教訓を与えるにすぎないが、それもまた他者＝人間に関する貴重な情報であることには変わりがあるまい。

18) 藤田義孝、前掲論文、pp.73-74。